

室生犀星全集

別卷一

新潮社

室生犀星全集 別卷一

昭和四十一年五月三十一日 發行
昭和五十一年八月三十日 セット版

著 者 室 生 犀 星
むろ せい さい せい

發行者 佐藤 亮 一

印刷所 二光印刷株式會社

發行所 株式會社 新潮 社

〒一六二 東京都新宿區矢來町七一
電話 東京03(二六〇五一)(業務)
東京03(二六〇五四二)(編集)
振替 東京 四一八〇八

(全十四冊セット) 定價 四九、〇〇〇圓

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

室生犀星全集

別卷一

題
字

編
纂

西	奧	福	伊	窪	中	三
川	野	永	藤	川	野	好
	健	武	信	鶴	重	達
寧	男	彦	吉	郎	治	治

別卷一
目次

日 記

大正十三年	(二月十四日—三月三十一日).....	九
大正十三年	(四月一日—六月二十六日).....	二四
大正十三年	(七月一日—十月十五日).....	三五
大正十四年	(八月五日—十二月十一日).....	五一
昭和三年	(七月一日—十一月二日).....	五六
馬込日記	(昭和三年十一月十五日—十二月三十一日).....	六六
續馬込日記	(昭和四年一月一日—三月三十一日).....	八五
寒蟬日記	(昭和四年四月十八日—五月十四日).....	九
昭和四年	(七月一日—十月十三日).....	一〇四
昭和六年	(一月一日—五月十三日).....	一〇七

昭和二十三年	(九月一日—十二月三十一日)	一六
昭和二十四年	(一月一日—九月三十日)	一六
昭和二十四年	(十月一日—十二月三十一日)	二七
昭和二十五年	(一月一日—十二月三十一日)	二六
昭和二十六年	(一月一日—十二月三十一日)	二七
昭和二十七年	(一月一日—六月二十三日)	四六

後記

日記の犀星	中野重治	四七
附記	伊藤信吉	四八一

日 記

大正十三年

大正十三年

〔二月十四日より
三月三十一日まで〕

二月十四日 積雪九寸。

午后三時室内階下五十三度、二階五十一度、ころみに寒
暖計を外に出して見るに三十九度也。あたたかき方也。

二月十五日

門の雪を掻く、昨日よりの風雪歇まず、寒鴉磧に群れ啞々
たること終日也。夜南圃氏來る。「金澤故蹟史」を借る。談
更けてなほ盡きず、まことに南圃氏は碩學風流の士なり。
東京社より「歳子」稿料百六十六圓來る。

十六日

母きたる。妻と炬燵の上にて花札を弄ぶ。夕方母かへる。

むかし打ちたりしならん七十五の人と思はれず、手なみなか
なか巧みなり。

風雪やうやく小歇みとなる。

千葉の人及び綾木より短冊依頼。されどなほ書く氣起ら
ず。

硝子戸に梅が枝さはり固きかな

雪に冴ゆる苔の上のあはゆき

炬燵の火をぼつかりとほじれり

風雪夜に入りて又臻る。

十七日

風雪なほ止まず、外室せざることに四日に及ぶ。倦むこと甚



20 cm × 15 cm・無野ア
ルス紙ノート(二冊)・
青インキ使用ペン書き

だし。

岡榮一郎君来る。

俳句

雪のとなり家はカナリヤの聲

十八日

午前母むかしよりありし古雛の内裏姫その他練雛を澤山持つて来る。顔付狐のごとき古き雛なり。よく見れば雛の表情みな白痴めきて快よし。今の世の人形おほね利巧けなる瞳付にくらべれば、おのづからその昔の人の心の有さまも窺はる。手足のもげたるものは衣装のみを残し、女中に與ふ。衣装ばかり残せば何となく面白し。ときどき曇天より「さ」せるうすら日に干すため縁側にならべおくこととせり。されど折々うす雪ふる。母がこのやうに重きものを提げ來りしかと思へば、その寺町よりの長き雪道の程思ひやられ、炬燵より出でてねぎらふ。鮎屋よりうなぎ取りよせ酒すこし晝餉に熱くして膳にそなへたり。母このごろ退屈すること甚だしく大概隔日くらゐに來るやうになり。來るごとに何か手みやげを持たざるることなし。老いたる人の心づくしも愛つべきものなるかな。

腹こなしのため門前の雪すこし掻きしに、雪の下に青き小草生えてありけり。朝しらげと云へる小鳥の餌に磨りませる

柔らかき草の、石垣を這ひるを見、その優しき「朝しらげ」の名を思ひ出したり。

朝しらげの雪を透きて見ゆ雪を掻く

朝しらげの縁に指ふれて見る

ひな

古雛を膝にならべて眺めてゐる

雪みちを雛箱かつぎははが来る

午后五日ぶりに外室、街上の雪やや消ゆ。飯森病院に行き、肺炎を診て貰ふ。固まりかけしが如し。予にこの肺炎の病あるは一昨年田端にて入院のとき根治せざりしものに據れることし。痔と小用とに害なし。

くわゐの子の藍いろあたま哀しも

くわゐの子つままで笑ふさびしさ

夜、桂井未翁氏来る。

十九日

朝 6.6

午後 3時 6.4

晩 6時 6.2

(今日より體溫をとることとせり。)

すこし温かく雨になる。昨日醫者に診てもらひしたため肌ぬぎしとき風邪ひきしらん、頭痛く物憂し。

窓前眺望

河原のゆきはなぎさから消える

とくさ五句

春まだ寒いとくさの矢り

子供部屋からのとくさの埃

とくさしんさたりけふのあはゆき

とくさはなつのとんほを夢みてゐる

ひと束ねのとくさの貸家

午后より曇天、風なくややぬくし、犀川べりを歩く。大橋

下の小橋のほとりなる古き紅梅いままなほ櫛牙たるを見る。

されどまだ蕾赤くはそまらず遅きがつねなり。人家の庭の梅

既にはじけるを見る。

二十日 朝 6.0 午後 6.2 晩 6.5

雲または雪。

床を起きる前に素晴らしき朝日が出てゐるも、間もなく片陰りになりうそ寒く朝食後には雲とはなりたり。まことに日の光いまは戀しとは思ふなり。日の光見ざること一週りの日をかぞへぬれば、心しめりがちにて東京に行き四五日遊ばんかなと思ふ。されどそれも億劫なればせん方なし、――。

「婦人之友」社より電報にて小説依頼。

「報知新聞」より隨筆依頼

しろ襖のはる寒い潮の音也

床屋に行く、夜に入りて雨となる。

二十一日

雪ふる。

母、奈良漬を揚げ来る、水雪ふりそとは冷たさうなり。破

の雪はだらに消ゆ。一週間ふりにて小説を書く。

子が予の小説はもう一度藝術的良心と潔癖の上に立たざる

べからざるを思ふ。されどそのやうなる間歇的昂奮は止めた

る方よからんと思ふ。いまのままに進むべきなり。朽ちはて

るものは朽ちるべく、残るものは残るなるべし。

入浴。

二十二日 6.1 6.0 6.4

朝來雲也。つひに霽れず。

香林坊の松竹館に行き、久しぶりにてカザリン・マクドナルドの映畫を見る。何となく東京にあるごとく暫らくは感ぜり。

栗島すみ子の「彼女の運命」を見る。はじめて也。いかにも瘠形の、すぢの通つたすなりとせる人なり。リリアン・ギツシュの牙えをこの人に持たせし。リリアン・ギツシュはときをりとぼけたところありて愉快なれど、栗島はあまりつき過ぎ映しすぎるやうなり。せいせい日本物を見ることを學ばんかな。

けふのカザリン・マクドナルドくらゐ美しく思ひしことなし。アニタ・スチユワードのごとく淋しき顔立ちながら、ふはあまり久し振りなるがために、あのやうに美しく思ひしならん。

夜、中島醫師見えられ、朝子の咳せるを診てもらふ。百日咳にあらざるも注意すべしと言ふ。朝子元氣よく頷くれなる也。すこし心配になる。

「女性改造」より原稿依頼。

二十三日

6.3
6.8
6.4

雪つもる。

朝子をつれ妻は病院に行く。宅診してもらふとかかりつけの醫者と行き合ふとめんだうなれば也。雪四五寸ふる。車の中なれど寒さにあてられぬやうに注意させる。百日咳にあらざれば幸ひ也。

唯の風邪なるよし、安心せり。

小島貞一、中野重治来る。晩食をくふ。

九時ころ宮崎孝政来る。泊る。

二十四日

6.2
6.4
6.3

雪也。けふで十日間日かげを見ず。

朝子の咳ややをさまる。この冬の願ひは朝子だけ風邪ひか

さぬやうにしたきものなり。生後半年は注射もできないから、とにかく一年を無事にそだてたきものなり。

俳句このごろ又作れず、仕事をせるためならんと思はる。

「母と母」書き終ゆ。

二十五日

5.9
6.3
6.4

少々雪。

カフェ、ブラジルに行く、宮崎と同伴、小島を電話にて呼ぶ。ひるめしを食ふ。

宮崎かへる。

朝子の咳ほほ快き方なり。

寒暖計を外に出して見るに氷點下なり。朝子の部屋は五十六度。階上書齋は五十二度。ときに夕方六時すぎ也。

二十六日

6.4
計らず
6.4

少々雪。

大活クラブにて活動を見、午後をすごす。二階に四五人、階下に十二三人、硝子戸に墨を塗りたる寂漠たる小屋なり。坐して眺むれば己れ田舎にあることの、うそ寒さをしきりに感ず。

平木二六よりの窮乏の手紙きたる。十圓送る。

少女俱樂部より少女の詩をたのみきたりしも、詩まで己れ

をまげて書きたくなければ断わる。

「婦人之友」(24)「文章俱樂部」(7)「報知新聞」(10)「女性改造」(5)へ原稿送る。

一月中の作句別の手帳にありければ左に寫し換ゆ。

一月上京のとき一句、我鬼山人に送りて

うすぐもり都のすみれ咲きにけり

雪

梅もどきの洗はれてゐる今朝の雪

同

松多き家並の家の温かな

山代温泉に遊ぶ

遠つ峯の風ならん障子の梅うごく

冬ばらに寄せて己が身に及ぶ

葉園ふ冬ばらも凍てる思かな

シクラメンくちびる紅き暖爐かな

空谷山人に送りて五句

空谷山人の家

雪は垣根にそうて残りけり

同

あるじ白衣の髻に老ゆ寒さかな

同

鉢梅にあかい手ぶくろ脱いである

本多町の家にて

羽ぶとん干す日かげすぐ雪になる

同

さびしく大きいつらなめて見る

つらら

つらら折れるころ向ふ机かな

犀川のほとりに轉居す

せきれいのかけ迅き欄の梅を折る

梅の二階は瀬向ひの明るさ

ひよどりは磧につづく林より

高柳眞三に送りて一句

梅に机を置き君が母老いぬ

硝子戸に梅が枝さはり固きかな

朝子に題す

から乳首にねむるひいなといづれぞ

福士幸次郎に送りし歌二つ

奥州の碇が關に君が子と

あそぶさま見ゆ淡しきかなや

あやぶかりしなみのいのちを守るときは

おのれ子を抱きよろこびにけり

二十七日 曇、あたたかし。

夜中にふと階下で何かとんと足音のごときもの音せり。下りしに妻床にあらず、厠にうめきこゑ聞ゆ。れいの目まひ也。やうやく氣附きしころ中島さん來られる。お寒いのお氣の毒に思ふ。つひに五時まで睡れず、七時に起きる。

朝子の咳なほ歇まず。

夕方、改造社より百參圓五十錢來る。

二十八日 曇、あたたかし。

今月支拂左の如し。

家賃四十五圓、女中給金十參圓、本屋十八圓、尼寺の隠居一周忌十五圓二圓小者、鮎屋拂ひ二十圓、カーテン屋五圓、平木に十圓、おとよさんに二百圓、醫者十圓、臺所、諸雜費百十圓、母へ二十圓小使、マント月賦三十圓、

45	13	18	17	20	5	10	10	110	20	30
										298
										200
										498

× 四百九十八圓也。

二月二十九日

母きたる。

午前は久しぶりにて晴天を見る。あまり珍らしければ自分

の夜具などを干す。山々の姿峻しかれど雪で輝いてゐるさま、遠隔の心わきけり。

午后小島のところに行き、かへりに朝子の咳すこし快き方なれば、子供ふとんの輕きを購む。及びズボン、又家内にはあぶら、香料など包みとして届けさす。

三月一日

春日つづき童女のふとり

朝子の咳やや輕くなる。くもり日なれど溫かく雪の山々かすめり。久し振りにて入浴。十二貫二百目あり、先月にくらべ二百目重し。中島醫師呼吸器の方よほどよろしと言ふ。十人に對する四人くらの割合の、肺炎のわるさなりといふ。

うぐひに朱いすちがつく雪解かな

藪の中のひと町つづき残る雪

岡榮一郎君と鏝甚に行く。

三月二日

晴。

小島貞一、太田南圃兩氏來る。

大谷繞石氏送別會發企人の事承諾す。